
殺し屋が女学院で教師をやっています・・・

グリム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺し屋が女学院で教師をやっています・・・

【Nコード】

N4102V

【作者名】

グリム

【あらすじ】

殺し屋が謎の女性に脅されて女生徒達を守っていく物語

始まり・・・

3月の初めの頃

俺、雨竜竜次はある女学院から教師をやってくれないかと頼まれた。

その理由は、「あなたが殺し屋だから・・・」

電話越しに女性が答えた。

殺し屋なら警備の薄いところを突いたりして殺したりするからである。

そのような点で自分を買ってくれたところは嬉しいが・・・

竜次：「なんで、俺が殺し屋だと知っている？」

女性：「何でつてあなたの同業者に聞いたから・・・」

竜次：「それは、嘘だな」

女性：「！！？」

竜次：「あんた、こっちの社会のことなんも知らないだろ？」

女性：「な、なにを言ってるの？裏の社会のことなら・・・」

竜次：「裏の社会ってなんだ？」

女性：「！！？」

竜次：「残念、今驚いただろ？・・・こっちの世界の情報は、表には出ない」

女性：「でも。少しぐらいなら」

竜次：「出ない」

女性：「なんで？」

竜次：「まず、お前らなら警察の情報とか言うかもしれないがあれは大体が嘘だ」

女性：「つえ？」

竜次：「簡単に説明すると警察事態、めんどくさいことはしないで何とかしてるんだ」

女性：「！！??」

竜次：「だから、その線はない。次に情報で金稼いでいる奴らだが・

・・悪いな先週全部殺したよ」

女性：「つな!？」

竜次：「だから、俺の存在知っている奴は今のところいないはずなんだけどな・・・」

女性：「つん、わかった分かりました話します」

竜次：「わかればいいんだ」

女性：「実は、私一回あなたに会っているんですよ」

竜次：「っは？お前さっきの話聞いてたか？」

女性：「はい、でもそれって殺すときだけですよね？」

竜次：「あ、ああ」

女性：「殺す前っていつか普通の生活の時あなた携帯落としたですよ？」

竜次：「ああ、海に落としたよ」

女性：「その落とした奴を拾ったの私なんです」

竜次：「!?!?な、なんでお前が持っているんだ？」

女性：「たまたま、海岸で拾って携帯としては使えませんがデータは残っていました」

女性：「つでそのデータでアドレスなどを見たのですが・・・」

竜次：「もういい、わかったお前の要求を呑むよ」

女性：「ありがとうございます。ついでに担当教科は体育です」

竜次：「わかった。つでいつから行けばいいんだ？」

女性：「来年度の入学式あたりからお願います」

竜次：「はいはい。でお前の名前は？こつちとしたら聞いておきたいのだが・・・」

女性：「それはお答えできません。言ったら消されそうですしね」

竜次：「そういえば、報酬は？いくらだ？」

女性：「ああ、報酬は給料なので期待しないでください」

竜次：「っえ!？まさか本当に普通の給料？」

女性：「はい、そうです。まあ、最初は不満かもしれませんが頑張って稼いでください」

竜次：「もし、足りないつと言ったら？」

女性：「それは、ありえませんが。あなたは殺しているの金のためじゃないでしょ？」

竜次：「それも、携帯のデータに？」

女性：「はい、あと言い忘れていましたが断った場合このこと世間に流しますので」

竜次：「わかった。つで仕事の内容は？まさか、ただの教師になればいいだけじゃないだろ？」

女性：「それについては学園長にきいてください、それでは・・・」
「プツン」

電話の切れる音がした。

仕方ない、この依頼を受けるか・・・

こうして、雨竜竜次の女学院の教師生活が始まった・・・

パニック！！

四月の初め女学院の入学式だ・・・

本来ならこんなところに用などはないのだが・・・

まあ、データを握られているし、面倒なことはしたくないからな・・・

ついでに、本音じゃちょっと女の子にも興味はあるがロリじゃない
はあ、とりあえず学園長のところにも行くか

3時間後

お、おかしいな・・・かれこれ3時間ほど歩いているが学園長室が
わからない

くそ、こんなことなら地図でも用意しとくべきだった

とりあえず誰かに学園長室がどこか聞くか・・・

お、ちょうど女の子達がこっちに歩いてくる

竜次：「すみませーん、学園長室ってどこですか？」

女？：「っへ？・・・」

竜次：「あのすみません？」

女？：「きゃああああああああああああ！！？」

！！？

な、なぜ？

変なこと言っただけ？

いや言っていないただ学園長室はどこかって聞いたはずなのに・・・

なぜ、悲鳴を上げている！？

考えている間に人が集まってきた

教師：「ど、どうしたの？」

女？：「た、助けてください、男の人がいます」

？

ただそれだけ？

俺はそう思ったがそうじゃなかった

教師：「あ、あなた何の目的があつてここに来たんですか!？」

竜次：「いや、学園長室に用があつて・・・」

教師：「学園長室?ま、まさか学園長を暗殺しにきたのですか!

!？」

は?

なんでそうなる!!?」

ただ、学園長に用があるだけなのに・・・

いや、あながち間違つていないかも・・・

でも、そうなるとなんでこいつは俺が殺し屋だと知っている?

教師：「ええーい、こうなつたら!!」

そう言つて教師は近くにあつた掃除用具に手を付けて・・・

俺に振りかぶつた・・・

ブン

・・・ちかくで箒がうなつた

つてなんで俺は教師に襲い掛かられているんだ?

と、とりあえず落ち着かせよう

竜次：「ちよ、ちよつと話を聞いてください」

教師：「悪党に聞く耳は、持ちません!!」

やばいな・・・

このままだと・・・

そう思つた時

?：「やめなさい!!何しているのですか?」

廊下に響いた

教師：「が、学園長!!助けてください」

いや、俺の法が助けてくださいなんですけど・・・

学園長：「たく・・・一旦落ち着きなさい・・・あと箒振り回すの

も」

教師：「わかりました・・・」

そう、言つて教師は手に持っていた箒を・・・

俺に投げつけた!!!

ガ、ガラガツシャーーン

ガラスが割れた音がした

あ、危な!!!

もうちよつとで俺にあたってたじゃないか・・・

まあ、間一髪避けられたけど・・・

教師：「つち」

学園長：「だ、大丈夫ですか!？」

竜次：「はい、何とか・・・」

学園長：「何してるんですか!!!?あなたは、教師とあるつものが

・・・」

教師：「だ、だって」

学園長：「だってじゃありません!!!とにかく二人ともついてきて

ください」

竜次：「わかりました」

教師：「はい・・・」

この、学園生活ものすごい不安になってきました

このままで何とかなるのか?????????

学園生活の始まり・・・

学園長：「たく、あなたは・・・」

教師：「すみません、学園長・・・」

学園長：「まあ、確かに女学院に男が入ってきていたら驚くかもしれません・・・」

教師：「ですよ〜」

学園長：「だからと言って幕を振り回すなんて・・・」

教師：「・・・」

学園長：「とにかく、雨竜先生あめりゅうに謝ってください」

教師：「ええ〜何ですか？」

学園長：「とにかく、謝ってください!!!」

教師：「・・・ごめんなさい」

竜次：「別にいいですよ。怪我もなかったし」

学園長：「よし、謝ったのでそろそろ職員を紹介したいと思います」

竜次：「わかりました」

学園長：「ええ〜と、とりあえず今さっきまで幕を振り回していたのは天智初先生てんじはつです」

竜次：「よろしく願います」

と手を差し伸べたのだが・・・

天智：「!!!?」

2、3歩後ろに下がった・・・
なぜ?

天智：「ごめんなさい。私、男の人苦手で・・・」
苦手?

これ、苦手って言うか・・・

完全に拒否されているような・・・

学園長：「ま、とりあえず以上です」

!!!!!!!???????

竜次：「え？今なんて？」

学園長：「いや、これで終わりです」
な、なぜ？

この学校って職員は二人しかいないのか???

竜次：「この、学園って職員が二人しかいないのですか？」

学園長：「いや、この前までは15人ほどいたのですが・・・」

竜次：「ですが？」

学園長：「・・・この前のバス衝突の事故知っていますか？」

竜次：「はい、一応・・・まさか!!」

学園長：はい、それに職員が13人乗ってまして・・・」

天智：「私たちは残業があつて残っていたのですが・・・」

竜次：「なるほど、わかりました。でも、確かこの場合って臨時の職員などが来るのでは？」

学園長：「なぜかわかりませんがここに来る前に全員やめています」
・・・」

天智：「一応、このこと国に言ったのですが全く動いてくれず今のところあなたを入れて3人だけです」

・・・多分これ全部何らかの組織が動いてるな・・・
つち、めんどくさいの受けちまつたぜ

今からでも断ろうかな？
でも、そんなことしたら・・・

学園長：「とりあえず、今はこの3人、力を合わせて頑張りましょ
う!!」

天智：「そうですね、男の人が増えたので力仕事が好きになりますね
!!」

うわ、なんだ？この雰囲気とてもじゃないが断れない!!
ま、どつちにしろデータを握られている限り俺に選ぶ権利はないか

・・・
竜次：「そういえば、一つ聞いてもいいですか？」

学園長：「はい？なんででしょうか？」

竜次：「俺の任務ってなんですか？」

学園長：「任務ってなんですか？」

え！？まさか無関係？？」

いやそんなはずはないあの女は学園長から話を聞いてくださいって言っていた

竜次：「本当に知りませんか？」

学園長：「はい？？」

・・・どうやら無関係見たいだが・・・俺の任務ってなんだ？

学園長：「とりあえず、今日はここまでにしたいと思います」

天智：「わかりました」

学園長：「そういえば、雨竜先生は宿直室に泊まるんでしたよね？」

え？

学園長：「はい。これ鍵ですので無くさないでくださいね？」

竜次：「わかりました」

とりあえず、鍵を受け取ったけど・・・

放課後

ふう、ここが俺の部屋になるのか・・・

見た目は、普通だが一つだけ気になるものがある

テーブルの上に手紙らしきものがある

竜次：「いつたいたれのだ？」

そう言っ誰の手紙か見たら・・・俺の名前が書いてあった

手紙にはこう書いてあった

「多分気づいていると思うけどこれは依頼の手紙です

めんどいので簡単に書きます・・・

依頼の内容はこの学園に通っている女生徒達全員を守ること

念のため言っておきますけど全員です。一人でもかけてはいけません

一応、誰が狙われているかは・・・メールなどで報告などしますが

わからない時があるので注意してください

それでは頑張ってください・・・

・・・

PS、私が誰なのかは探らないほうがいいですよ
なるほど、依頼の内容は護衛か・・・

・・・って全員!!!?

無理だな。うん。諦めよう。それが一番賢い。
ん?

2枚目があるのか?

そう思ってみたら・・・

二枚目にはこう書いてあった

「今のところ、狙われているのは天智 初、初音 みう、橋本 蘭^{らん}
の3人だけです。で頑張ってください」

ま、まじかよ!!!

まさか天智先生まで狙われているのか??

とりあえず情報がほしい

この依頼受けるとか抜きで・・・

こうして、俺の女学園最悪の生活が始まった・・・

無力・・・

とりあえず、知り合いに電話することにした

？：「はい？もしもし？」

竜次：「おい、俺だ竜次だ。聞こえてるか？信二しんじ？」

信二：「はいはい、聞こえてますよ。で何の用？」

竜次：「俺が今務めている女学院の情報がほしい」

信二：「了解。それだけ？」

竜次：「ついでに、武器なんかも手に入るか？」

信二：「てめーのせいで手に入りにくくなったけど手に入るぜ」

竜次：「じゃそれも頼む。金は通帳から勝手に取っとけ」

信二：「はいはい、これらはいつものコインロッカーに置いてくからよろしく〜」

竜次：「了解」

信二：「まあ、終わったら連絡するから」

翌日

とりあえず、情報と武器は手に入ったけど・・・

完全に寝不足だ・・・

うう、おかげで眠い・・・

くそ、信二のやつまさか、夜の3時ごろに終わらせるとは・・・

そのせいで、まだ資料見れてない・・・

天智：「おはようございます」

竜次：「あ、おはようございます」

天智：「それじゃあ、今日から授業が始まるので頑張りましょう！」

竜次：「そういえば、どうやって授業行うのですか？教師が学園長含めて3人しかいないのに」

天智：「基本的には大学のホールみたいなのでやりますけど今日はあなたの紹介があるのでとりあえず体育館に集まってもらってます」
竜次：「俺、大丈夫ですかね？」

なんたつてここに来たとき叫ばれたからちよつと怖い

天智：「・・・た、多分大丈夫だと思います」

竜次：「た、多分ですか??」

天智：「さて、それじゃあ行きましようか〜」

竜次：「ちよ、ちよつと待つてください心心の準備が・・・」

そして、俺は案の定物を投げられ・・・なかつた」

???

多少来るかなつと思つた不満の声も一切ない

なぜだ?

すると、学園長から

学園長：「多分これから、生徒達が押し寄せてくるので覚悟しとい

てくださいね?」

竜次：「何ですか?」

学園長：「いや、クラブを作りたいと言う生徒達がこの学校にいっ

ぱいいるので・・・」

ああ、なるほど。俺を顧問にしようとするのだな。

なら・・・

数分後

生徒? 「すみませーん。雨竜先生見ていませんか?」

学園長：「いえ、知りませんが・・・」

生徒?：「そうですか、ありがとうございます

そして、俺が出した答えが・・・逃げるが勝ち!!

で、逃げたのはいいのだが・・・また迷ってしまった・・・

竜次：「さて、これからどうしよう?」

?：「いや、戻ったほうがいいんじゃないですか?」

竜次：「確かに、このままじゃ授業が・・・」

?：「???」

一瞬、殴りかかるところだった

まさか、この俺の背後に簡単に回り込まれるとは!!

? : 「大丈夫ですか？」

竜次：「はい、大丈夫え〜と？」

? : 「あ、私の名前初音 みうつて言います」

竜次：「! ? そ、そうですか」

みう：「それより、これ落としましたよ？」

竜次：「あ、ありがとうございます」

や、やばかった

まさか、この学園の資料も落としたとは!

竜次：「失礼ですが・・・中身見てませんよね？」

みう：「はい。見てませんけど・・・」

竜次：「ならいいんです」

ふう、とりあえずこの様子からして見てないようだな・・・

それにしても、話かけられたのが護衛の対象のやつとは・・・

みう：「あの〜一つ聞いてもいいですか？」

竜次：「はい、なんででしょう？」

みう：「実は、私・・・迷子なので教室まで連れてつてくれませんか？」

か？」

竜次：「あ、いいですよ。僕も迷子ですけどそれでもいいなら行き

ましようか？」

みう：「はい。お願いします」

10分後1 - R教室

みう：「ありがとうございます」

竜次：「いや、いいですよ」

みう：「それじゃあ・・・」

・・・ガラッと扉が開いて

みう：「・・・」

竜次：「どうかしました？」

みう：「あ・・・あれ」

その方向を見てみると

・・・天智先生が血まみれで倒れていた・・・

みう：「あ、あう。・・・きゃあああああああああああああああああああああ
ああああ」

・・・悲鳴が鳴り響き人集まってきた・・・

竜次：「だ、大丈夫ですか！！？」

近くに近寄ったがもう

・・・息をしていなかった・・・

こうして、学園生活の一人目の犠牲者が出たのであった・・・

地獄の鬼ごっこ……前編

う、うそだろ？

まさかもう？

でも、この天智先生は俺の紹介の時はまだ……

違う。俺はその時会っていないし、見てもいない……

そして、生徒達が集まっているからその間に殺すことも可能……

しかし、誰だ？

だが、考えている時間はなさそうだ……

竜次：「とにかく、生徒の皆さんはこの教室に入らないでください
！！」

生徒？：「は、はい！！わかりました」

竜次：「ほら、初音さんも……」

みう：「はい。わかりました」

竜次：「もしかしたら、殺人鬼が潜んでいるかもしれないから皆
さんは……」

くそ、そういえばこのあたりのことよく知らないんだ

みう：「あ、あおう。寮に行くつてのは駄目でしょうか？」

竜次：「寮？」

みう：「はい、あそこならセキュリティがしっかりしてますので
……」

竜次：「わかりました。そこまで、案内してください。皆さんは私
の後についてきてください！！」

生徒？「わ、わかりました」

とりあえずはここから遠ざけたほうがいいかな

もしかしなくても、この人は狙われているから……

そういえば、もう一人の護衛対象者は？

……多分まだ大丈夫だろう。

一日に何にも殺すバカはいないから

竜次：「ふう、ここまでくれば平気かな？」

みう：「はい、多分・・・」

とりあえずは何とかなるだろう

みんな疲れてるな

・・・無理もない死体を見たのだから・・・

竜次：「初音さん、みんなのことよろしくお願いします」

みう：「はい？何ですか？」

竜次：「僕は、またあの場所に戻りますので・・・それじゃ！」

みう：「え！？ちょ、ちょっと！！？」

1-R 教室

ふう、と、とりあえず戻ってこれた

しかし、酷い殺され方してるな・・・！！？

竜次：「ウソだろ？」

なんで、こんなに血が出ているのか調べたら・・・

竜次：「この傷口、日本刀の傷あとに似ている・・・」

そう、よく調べれば・・・切り口がきれいで包丁などではないこと

がわかる

そして、ところどころに銃創の後がある・・・

まさか・・・切った後にさらに銃でとどめをさしたってことか・・・

笑えねえな・・・

殺すならただ切るだけでいいのに・・・

そう、考えていたら後ろから殺気を感じた・・・

ヒュンっとなった

あ、危ねえもうちょっと天智先生に会いに行くところだった

仮面の？：「つち。次は外さない・・・」

そう言つて次は銃を抜いて

Bannon!!!!!!!!!!

撃ってきた!!!!!!

とっさに俺は机の陰に隠れた

やばい・・・こいつイカレテやがる

まさか、サプレッサーもなしに撃つてくるとは・・・
とにかく、反撃するか、逃げないっつと

そう、考えている内に・・・

みう：「すみませーん」

え!!!?

ウソだろ?

なんでこいつがここにいるんだ?

その間に仮面をつけた者は・・・

狙いを変えた!!!

やばい、このままだと・・・あの子は確実に死ぬ

バアン!!!!

俺はとつさに初音をかばって

みう：「え?えつえ??」

竜次：「ツク。と、とりあえずついてこい!!」

みう：「は、はい!!!」

くそ、右肩にあたった

宿直室

竜次：「は、はあ」

みう：「はあ、はあ」

竜次：「と、とりあえず。ここまでくれば安心だ・・・」

そう、ここには昨日手に入れた武器がある

とりあえずは、ハンドガンだけ持っていくか・・・

そう、考えていると・・・

みう：「あ、あの人はなんですか?」

竜次：「気にするな・・・」

みう：「気になりますよ!!教えてください・・・」

竜次：「わかった。あいつの正体はわからないけど目的はわかる・・・

」

みう：「な、なんですか?」

竜次：「お前だよ、みう・・・」

みう：「え！???」

竜次：「なぜかはわからないが・・・多分。今、狙われているのはお前だ・・・」

みう：「ウソ？ですよね？？雨竜先生？」

竜次：「残念だがウソじゃない・・・」

そういつたら、みうは・・・走って宿直室から出て行った！

や、やばいあいつ何考えているんだ？

と、とにかく追わないと・・・

仮面のやつに殺される！！

クソこんなことになるなら話さないほうがよかった！

こうして、俺と仮面のやつとの鬼ごっこが始まった・・・

地獄の鬼ごっこ・・・中編

とりあえず、今の状況の整理をしよう。

今、俺が見つけなといけないのが初音 みう

絶対に見つかってはいけないのが仮面の人

もし、見つかったら確実にどっちかは死ぬ

しかも、万が一先に初音 みうを先に見つけられたら・・・終わりだ

また、あの惨劇を繰り返すことになるであろう

とりあえず、俺が見つけないといけないのだが・・・

クソ！この学校広すぎて訳が分からん

信二に連絡して場所を特定してもらおうか？

いや、駄目だ。そんなに時間の余裕がない

・・・そういえば、あいつからもらった情報に手がかりがあるかも

知れない！？

とりあえず俺は、その情報を見ることにした・・・

「初音 みう 15歳

趣味などは省略

基本的にはおとなしい性格なのだが

従妹・・・橋本 蘭のことになるとまわりが見えなくなるらしい

この橋本 蘭は昔重い病気にかかり足が動かなくなったらしい

現在は知り合いの学園の寮で生活している」

！！？

なるほど、いい仕事してるぜ信二

とにかく、向かう場所は決まった

っと思つた時・・・殺気を感じた

！！とにかく、身を隠れるか・・・

仮面の人：「どこに行った？？確かこつちに来ていたようだが・・・

ふう、とりあえずはここに隠れているか・・・

ん？何してるんだあいつ？手元に何か・・・あ、あれは！！！！
この学校の地図！？バカな、なんであいつが持っているんだ？
教師の俺ももらっていないのに

しかも、よく見ると赤い点がいくつも・・・まさか！！？

仮面の人：「おーい！！聞け初音 みう、橋本 蘭！！お前達がどこからどう来るかはこっちには手に取るようにわかる。もし、おとなしく出てきたら楽に殺してやるう。さあ、出てこい！！！！」
「
っち！本当にイカれてやがる

楽に死なせるから出てこいだと？

そんなもんあるわけねえだろ？

とにかく、今はあいつの地図を今すぐにも取らないと・・・
みう達が危ない！！

だがどうする？不意打ちでやってももし外れればこっちがやばい
普段なら撃って殺すのだが今は無理ぽい・・・
さて、どうする？

右手を使わずにあいつをどうやって殺す？

そつえば、こっつて理科室だよな？人体模型もあるし

あ！！、もしかしたら、あれがあるかも？

・・・よし、目当てのものはなかったけどこれだけあれば・・・
反撃開始だ！！

こうして、反撃が始まった・・・

地獄の鬼ごっこ・・・後編

さて、反撃できる材料は手に入れたから・・・
あとは、みうを探して終わりだな・・・

ただその、みうがどこにいるかがわからないけど・・・

いや、信二の情報からだらんと蘭のことになるらとまわりが見えなくなる
でも、蘭は足が使えないなら寮らうにいるはずだ・・・

まてよ、確か今日けふつて俺のために体育館たいいくくわんに集まっていたはず・・・

そして、そのあとに天智先生あまぢせんせいが殺ころされていてすぐに避難ひなんさせたけど・・・

蘭は足が不自由ふじゆうで避難ひなんできてなかったら・・・

そして、それに気が付いたみうが確かめに来たとしたら・・・

つじつまが合あつてきたな・・・

もし、この推測すいそくがああつていたら。今はとんでもなくピンチピンチつてこと
か・・・

どうする？どうすればいいんだ・・・？

そう考えている内に後ろうしろから足音あしながした・・・

竜次：「誰だ！！」

学園長：「わ、私わたしですよ・・・学園長がくえんちやうです」

竜次：「あ、学園長がくえんちやう一つ聞いてもいいですか？」

学園長：「はい。でもその前にやらないといけないことがあるんんで
すが・・・」

竜次：「なんですか？それは、よかつたら手伝てづいますよ・・・」

学園長：「ありがとうございます・・・それじゃあ、死しんでくださ
い！！！！」

竜次：「！！？」

学園長は、俺おれに目がけて包丁たばたけを振り回まわしてきた・・・

な？なぜ！？

学園長：「あなた、ですよ？天智先生あまぢせんせいを殺ころしたのと・・・生徒達せいとだち

を殺そうとしているの……」

竜次：「ち、違います！！なんでそんなことになっているんですか！！？」

学園長：「今、さっき電話がかかってきましたね……その人が言ったんですよ殺したのは……あなただっただね」

竜次：「デ、デタラメです。そんなの信じないでください！！」

学園長：「じゃあ、なんで？手に銃を持っているのですか！！？何で？宿直室から生徒が走って逃げたのですか！！！！？？」

やばいな、学園長相当パニックっている

どうする？事情を説明して助けてもらうか？それとも今ここで殺すか？

いや、どっちとも駄目だ今ここでしなきゃいけないのは……

学園長に黙ってもらおうしかないか……

竜次：「すみません、学園長」

俺はすかさず学園長に蹴りを入れた……

学園長：「ガ、ガハッ！」

そのまま、学園長は倒れこんだ……

ふう、とりあえずこの人をどっかに隠しておくが見つかったら大変だし……

そう、思っただけ俺は学園長を担いで近くの教室に入ったら……

みうがいた……

近くに車いすに乗った子もいるけどあれは多分蘭であろう

竜次：「おい！大丈夫だったか？」

みう：「……」

蘭：「……」

竜次：「ふう、とにかく見つかったよよかったぜ。よしこのまま逃げるぞ！」

みう：「こつち、こないでください！！」

竜次：「？？な、なんで？」

蘭：「あ、あなたが先生を殺したのですか？」

しまった、この教室の前で暴れていたからこいつらにはさっきの会話を聞かれてた!!

しかも、今さっきみうが大声出したから仮面のやつがすぐに来る!! どうする?このまま4人でどっかに隠れるか?いやそんな場所はない!?

・・・!!そういうば、さっき理科室からくすねたあれがある!! あれを使って仮面のやつを殺すしか手は残ってなさそうだ・・・

竜次：「やるしかないか・・・」

俺は手に理科室でくすねた硫酸を手に取りふたを開けドアの前で仮面のやつを待った」

数分後

仮面の者：「おかしいな、確かこっちから声が聞こえたのだが・・・ここか?」

そういつてドアが開いた

仮面の者：「!!!?!」

竜次：「おせえよ!!!!」

俺は硫酸を相手にぶっつけた

仮面の者：「うあああ、あ、熱い!熱い!!助けてくれ。頼む!?!」
そして次に俺は・・・銃を持ち・・・撃った!!

バアンッと鳴り響いた

そして、仮面のやつは倒れて動けなくなった

こうして、地獄の鬼ごっこは終わった・・・

みうと蘭の説得

ふう、やってこいつを仮面のやつを殺すことができたけど・・・
失敗したなあ・・・みうと蘭に完璧に見られている
さて、ここからどうするかな？

多分、めんどくさいことになると思うけど・・・
とりあえず、警察が来る前に逃げるか

竜次：「おい、お前ら動けるよな？」

みう：「は、はい」

竜次：「よし、なら警察が来る前に逃げるぞ」

蘭：「なんで・・・ですか？」

竜次：「警察が来ると厄介なことになるからだ」

みう：「それは、あなただけじゃないのですか？」

竜次：「まあ、確かにそうかもしれないけど・・・多分、お前達が
こいつを殺したことになると思うぞ？」

みう：「！？なぜですか？」

竜次：「今の警察って信用できないし、それにもしかしたらこいつ
の仲間がそこにいて、殺されるかもしれない」

蘭：「ウソです！！そんなの警察がそんなことするはずないじゃな
いですか！！？」

みう：「第一、私達はあなたがこの人を殺したのを見ていたんです
よ！！」

竜次：「じゃあ聞くがそれを警察が100%信じてくれるっと言
い切れるのか？」

みう：「はい、言い切れます！！」

竜次：「なんで？」

蘭：「警察は市民の味方だからです！！」

竜次：「笑わせるのもいい加減にしろよ。確かに警察は表向きには
正義の味方だが・・・」

みう：「だが？」

竜次：「裏じゃいろんなことしてるんだぜ」

蘭：「っへ？」

竜次：「たとえば、政治関係でお偉いさんの息子の事件をもみ消したりしてるんだぜ」

みう：「！！？」

竜次：「しかも、全部金で解決してるから怖い世の中だぜ・・・」

蘭：「そ、そんな！？」

竜次：「まあ、そんなわけだから死にたくないなら俺について来い
みう：「い、嫌です」

竜次：「な、なんで？」

蘭：「そうです。もしかしたらあなたが全部ウソを言って私達を殺そうとしているかもしれないじゃないですか！？」

竜次：「はあ、そんなことか・・・わかったお前たちにもプラスになるような条件を言えばいいか？」

みう：「はい？」

竜次：「もし、蘭の足が治るとしたら？」

蘭：「！！？？」

みう：「ど、どういうことです？」

竜次：「俺なら、今の日本にも入ってきてないような医療技術が手に入るから・・・もし、ついてきてくれるなら手に入れてやってもいいんだぜ？」

蘭：「！？で、できるなら考える時間をください！！」

竜次：「無理だ。もしかしたら警察がもう、すぐに来るかもしれないから考える時間はない。今ここで来るか来ないか決めろ」

蘭：「・・・わ、わかりました。私ついていきます！」

みう：「ら、蘭！？いいの？」

蘭：「うん。もう、私車いす生活がいやなの、だから・・・」

みう：「だ、だったら私もついていきます！！」

竜次：「よし、そうと決まればついて来い」

みう：「わかりました！・・・そういえば学園長どうします？」
竜次「あゝめんどくさいからそこら辺のロッカーに入れとくか」
そう言つて俺は学園長をロッカーに・・・入れた

蘭：「大丈夫なんですか？そこに入れといて・・・？」

竜次：「大丈夫、大丈夫何とかなるさとにかく逃げるぞ！！」
そして、俺たちが逃げた10分後に警察がきた

竜次の家

あゝ久しぶりにかえつてくれたな

ここなら安全だし治療するにはもつてこいの場所だ
とにかく、中に入って今後の対策を練らないとな

こうして、俺は久しぶりに我が家に帰つてくれたのだった

とにかく、信二に連絡して何とか治療する方法を見つけてもらわないと・・・

俺はそういいながら新しいケータイを使って信二を電話した

信二：「おい？なんだこんな時間に・・・こちら徹夜で眠いんだけど・・・」

竜次：「はいはい、そのことはありがとうございます。で頼みがあるんだけど・・・」

信二：「またか！？どんだけ仕事させるつもりだよ・・・」

竜次：「死ぬまで」

信二：「まじで！！！！」

竜次：「大まじだ！！！！」

信二：「・・・聞くのやめてもいいですか？」

竜次：「駄目だ」

信二：「はいはい、そういうと思いましたよ・・・」

竜次：「話が早くて助かるっで仕事のことなんだが・・・蘭の足つて治ることつてあるのか？」

信二：「ああ、そのことか・・・結論から言つと・・・」

竜次：「結論から言つと・・・？」

信二：「外国では治るらしい」

竜次：「つち、外国か・・・日本には入ってきてないのか？」

信二：「ああ、ていうか多分100年たっても入つてこないと思う」

竜次：「？なぜだ・・・外国で治るなら・・・なるほど裏の話か・・・」

信二：「そういうこと、だからこの件に関してはやめたほうがいいぞ」

竜次：「それができたら苦労しない」

信二：「？お前の仕事つて襲つてきた殺し屋を殺すことだろ？」

竜次：「ああ、そうだ。そして、その殺す場面を見られた」

信二：「げ！そりゃめんどくさいことになったな・・・」

竜次：「ああ、それで今、このことを聞いている」

信二：「なるほどな、OKそういうことなら良いこと教えてやる」

竜次：「なんだ？そのいいことって？」

信二：「実はな、蘭ちゃんの病気は薬で治るんだ」

竜次：「本当か！？」

信二：「ああ、しかもやり方際間違わなければいける」

竜次：「なら、その方法を教えてくれ！今すぐ！！」

信二：「落ち着け。確かに簡単に作れるのだが・・・なんで今まで作らなかつたか疑問に思わないのか？」

竜次：「！？確かに作り方が簡単ならもう日本に入ってきて蘭の足が治っているはず・・・」

信二：「これは、噂だが・・・もしかしたら裏のやつらが外国の一部の地域で実験をしていたらしい」

竜次：「何の？」

信二：「今、蘭ちゃんがかかっている病気のやつさ」

竜次：「！！？」

信二：「そして、やつらが治療方法などを高値で売っているって話だ」

竜次：「なるほど、とんだクズ野郎だな・・・？ちよつと待て今の話からだ」と蘭達は昔・・・」

信二：「ああ、外国にいたってことになる。しかも、みうちちゃんとセットでな・・・」

竜次：「だが、病気にかかっているのは蘭だけだぞ。みうは病気にかかっていない」

信二：「考えられるのは色々あるが有力なのは二つ」

信二：「一つはみうちちゃんがその病気に対して強かったのか？」

竜次：「もう、一つは・・・？」

信二：「いるだろ外国に行っても感染症のもとになる・・・虫が」

竜次：「蚊か！!?」

信二：「正解、多分やつらは蚊を使ってやってたんだと思うぜ」

竜次：「なるほどな、とりあえずそこらへんのことがか分かったからそろそろ薬のことについてだが・・・」

信二：「ああ、そうだったな。今から言う薬品と手順をしっかりとメモしろ」

竜次：「了解」

信二：「ついでに言っとくけどもしかしたら・・・いやなんでもない」

こうして、俺は信二に蘭の病気の薬を教えてもらったが、あいつめ最後に気になること言い方しやがって・・・まあいい、これで蘭の足が治るのだからな

蘭：「大丈夫なんですか？この薬」

竜次：「多分、だが死ぬことは絶対はない」

みう：「え？多分ってなんですか！？」

竜次：「実はこの薬は俺の知り合いに作り方教わったのだが最後に言葉を濁らせたんだ」

みう：「そんな、薬を飲まそうとしてるんですか！！？」

竜次：「別に強制はしないぞ。ただ、絶対に治る」

蘭：「！！わかりました。私飲みます！！」

そういつて、蘭は薬を飲んだ・・・と同時に電話が鳴った

竜次：「はい？もしもし」

信二：「俺だ信二だ！！薬は作ったか？」

竜次：「ああ、作って今、ちょうど飲んだよ」

信二：「！！まじか・・・実はな、この薬の副作用がわかった」

竜次：「な？なんだと、もしかして飲んだら死ぬのか！？」

近くにいるみうが不思議そうに見ている

信二：「いや、そんなたいそうなことじゃないんだが・・・」

竜次：「なんだ？副作用って教えてくれ！」

信二：「ああ、実はなつて言うか今、蘭ちゃんが飲んだんだよな？」

竜次：「ああ」

信二：「なら、そろそろか」

竜次：「ん？どういうことだ？」

つと言った瞬間横から何かがぶつかってきた！！

竜次：「ツク、いつたいなんだ：！！」

ぶつかってきたものが何かがわかった

蘭：「えへへ」

蘭だつた！！！！

しかも、なんか様子がおかしい！！

竜次：「おい！信二どういうことだ！？これ！？」

信二：「ああその反応だとあたりかゝ実はなこれ原料が何かに似てるな」と思ったらなんだつたと思っつ？」

竜次：「なんだ!？」

信二：「惚れ薬の材料に似てたんだよ」

竜次：「まじか!?!?!」

信二：「大まじだ。しかも、普通は時間経つにつれて惚れ薬は効力がなくなるのだが・・・この病気と合わさることでその弱点がなくなった!?!?!」

竜次：「なんてことしてくれるんだよ!?!どうすんだこれ!?!?」

信二：「・・・」

竜次：「黙るな!?!?!?!」

信二：「まあ、なんつーか。うん、お幸せに~~~~」

そういつて信二は電話を切った

さて、ここからどうしよう?

どう考えても標的は俺だよな・・・

多分、このままじゃ俺は確実に・・・みうに殺される!?!?!

どうにかして、この状況を元通りにしないと・・・

こうして、俺の弁解が始まった・・・

地獄の鬼じっじ?・・・始編

ぎゃああああああああああああああああ
やばい、ここまで女が怖いとは思ってもなかった!
まさか、たった一か月でこうなるとは・・・

1か月前

俺は、事件のことを学園長に正直に話、それをできる限り助けてくれるって言ってくれた。

おかげで、こっちは何とかなったけど、問題はみうと蘭なんだよなあまあ、何とかなるだろうそう思って望んだのがバカだった
蘭は隙があればどこでも抱き着いてくるし

そのたびに、生徒たちに変な目で見られるは大変である
みうはみうで言葉で攻めてくるから怖い!!

どうしよう、信二が言うには・・・

信二：「もうyou責任とりなYO」

・・・とりあえず、次、町であった時殺すか
とりあえず、この状況を変えないと!!!

回想終了

そう、奮闘する俺であったが・・・
なんかもう、精神やばくなってきた

このまま、蘭とハッピーエンドになっただけいい気がしてきたし

と、思ったらケータイがなった
ん?また、蘭か?それともみうか?

そう、思っていたら全然別の人からだった

謎の女：「お久しぶりです。この前はご苦労さまでした

ついでに、今回から狙われている人が一人増えました

天智 美野里てんじ みのりです

知ってるかは知りませんが天智先生の妹です

多分、この前の任務のことと関係ありますがそれはがんばってください

だから、今狙われているのは美野里、みう、蘭の3人です
今度は誰も死なないようにお願いします」

！！

マジかよ

まさか、天智先生に妹がいたとは！

信二もこの情報は知らないのか？

なぜだ・・・？

普通なら簡単に情報が入ってくるのにあの頼んだ情報には書いてなかった

だが？信二も人間だ

もしかしたら、見逃していたのかも知れない・・・

とりあえず、電話して、情報を集めるか

つと思つた時ケータイが鳴つた

信二だつた

信二：「もしもし！！聞こえているか！！？」

竜次：「どうした？そんなに急いで・・・」

信二：「とりあえず、聞け！！一か月前事件で天智先生のことだ！

！！

竜次：「ああ、天智先生に妹がいることだろ？」

信二：「違う！！・・・？まじで？」

竜次：「は？お前何言ってるんだ？そのことで電話したんじゃ・・・

」

信二：「とりあえず、その話は置いてくれ！こつちの話は襲ってきたやつのことだ！！」

竜次：「？？なんか、おかしいことがあつたのか？」

信二：「ああ、とんでもないことが分かつた」

竜次：「なんだ！？」

信二：「天智先生を殺したのは・・・まだ、生きている」

竜次：「なんだと！？確か殺したはずじゃ・・・」

信二：「お前は、殺した場面を見たのか!？」

竜次：「いや、見てないが・・・あ！そうだ確か見たのはもう死んだあだった」

信二：「しかも、その時はみうちちゃんを連れていたからその場から離れた・・・」

竜次：「俺が殺したのは別のやつってことか・・・」

信二：「ああ、多分、コンビを組んで殺していたのだろうが・・・」

竜次：「俺が殺したと・・・」

信二：「ああ、だからお前達気を付けたほうがいいぜ」

竜次：「わかった」

信二：「そういえば、聞きたいことが一つあるんだが・・・」

竜次：「なんだ？」

信二：「お前が、殺したのは銃を持っていたか？それとも？」

竜次：「いや、それはわからない、あいつは手に・・・」

信二：「？どうした？」

竜次：「何を持っていったっけ？」

信二：「とりあえず、そのことをみうちちゃんと蘭ちゃんに聞け!!」

竜次：「わかった!!」

信二：「こっちは天智先生の妹のことを探す!!」

そういつて信二は電話を切った

こうして、地獄の鬼ごっここの第2が始まった・・・

地獄の鬼ごっこ?・・・誘拐編

はあはあ、クソなんでこんな時にみう達に電話がつかないんだ?
まさか?もう?

チクシヨウ!!

マイナスなことを考えるな!!

俺はみう達を守ればいいんだ!!

だが、本当にどこに行っただんだ!?

いつもなら、総合教室にいるはずなのに

今日に限って二人ともいない!!

っと思っっていたら後ろから何かを感じた!?

なんだ!?!と思ひ振り返ると女の子がいた・・・

女生徒:「!?!?」

竜次:「いや、なんでもないんだ」

俺はそのまま逃げるようにその場から離れた

ツクどこにいるんだ??

考える。何か閃け

あいつらはいつも一緒にいるから・・・

っと考えているとケータイが鳴った

!?!?

まさか、みう達か!?

と思っただけど違っただしかも知らない番号だ・・・

俺はとりあえず電話に出た

竜次:「もしもし?」

?:「始めまして、私、あなたの大事な生徒達を預かっているもの
ですが・・・」

竜次:「!?!?なるほどな・・・だが?どうやって?」

?:「それは、お答えできません」

竜次:「目的はなんだ?」

? : 「そうですねえ、あなたの命なんですけど・・・」

竜次 : 「なら、くれてやるだから・・・」

? : 「そう言うと思ってましたよ。いや、思ってたよ」

?? : 「口調が変わった？」

? : 「ああ、もういいや」

竜次 : 「? 誰だ？」

? : 「そうだなあ、簡単に言うとお前も知っている奴だよ」

竜次 : 「だから? 誰だよ??」

? : 「わかった。じゃあ、ヒントをやる・・・0719だ」

竜次 : 「!!!まさか・・・」

? : 「ああ、そうだよお前と同じだよ」

0719 : 「番号は違うが確かそれは俺と同じの・・・実験体

0719 : 「やっと、わかったかだが、名前も教えてやるよ・・・」

竜次 : 「やけに親切だな」

0719 : 「これから、ゲームをするのに名無しはだめだろ」

竜次 : 「ゲーム?」

0719 : 「ああ、そうだ簡単に言うとお鬼ごっこ・・・ただしなん

でもありのな」

竜次 : 「なんでもありか・・・そのなんでもには人質を殺すとか入

っているのか?」

0719 : 「お!結構お前鋭いな・・・大丈夫だ今回の賞品はこの

女生徒と天智だからな」

竜次 : 「賞品には手を出さないと・・・」

0719 : 「そういうこと・・・ああ、そういえば、勘違いしてる

と悪いから一応言っとくけどこっちが誘拐したのは初音 みうと橋

本 蘭しかないから・・・」

竜次 : 「わかった、俺は天智先生の妹を探さないといけないんだな」

0719 : 「正解。場所は00ビルの全体だ」

竜次 : 「全体?ずいぶんと広いんだな?」

たしか00ビルは30階だてだぞ

0719：「そこがこつちとしたら楽なんだ」

竜次：「わかった。っで？名前は？」

0719：「ああ、そうだった俺の名前は山中 虎太郎だ」

竜次：「わかった」

虎太郎：「制限時間は今から7時間それが過ぎれば全員お陀仏だ」

竜次：「ああ、じゃあな虎太郎」

虎太郎：「ああ、竜次」

こうして、地獄の鬼ごっここのルールが決まって俺は昔のことを思い出していた・・・

地獄の鬼ごっこ？・・・過去編

10年前

俺の親は、俺の記憶にないうちに捨てられた
別にそれはどうでもよかった

ただ・・・なんでこんなところに捨てられたのかわからない
看守：「静まれ！！王からの挨拶だ・・・」
全員静まった・・・

俺が捨てられたのは・・・地図にない国

地図に書いてないって知るには5年かった

俺が幼い頃は、みんな優しくかったが、5年前に軍隊が来て
反対する者を・・・数名殺した

それが、最初に起きた事件だ

誰もが、見て見ぬ振りをした

反対していた人までが・・・

理由は、簡単だ

自分は、安全に生きたいからだ

そして、一か月が過ぎた頃に・・・

軍人達は、15未満の子供達を連れて行った

もちろん、その時の俺は10歳だったから連れて行かれた

どこに、行くかは知らなかったが・・・

非常に不安になった

大人は誰もいない

だから、誰が殺されても自分たちは抵抗できない

そう、思っていた時に声をかけられた

？：「お前を日本人だよな？」

竜次：「ああ、そうだが？」

？：「よかった、俺も日本人らしいんだ」

竜次：「？らしい？」

? : 「つそ、俺の親はここにきて俺を捨てて行った」

竜次 : 「奇遇だな、俺もだよ」

? : 「そうなんだ、酷い親だよな」

竜次 : 「ああ、そうだな」

? : 「そうだ、自己紹介が遅れた！俺の名前は信二よろしくな」

竜次 : 「俺の名前は竜次よろしく!!」

そうして、俺は信二と出会った」

ブルブル

ツは、そうだ、昔のこと思い出している暇はないんだった

俺は急いで、電話に出た

竜次 : 「もしもし?」

信二 : 「もしもし、やっとわかったぞ、天智先生の妹のこと」

竜次 : 「ほんとか!!?」

信二 : 「ああ、ついでに今、いる場所もわかったぜ」

竜次 : 「教えてくれ!早く!!」

信二 : 「なに、急いでるんだ?」

竜次 : 「いいから、教えろ!」

信二 : 「はいはい、今00ビルの10階にいるぞ」

竜次 : 「な!なんでそんなところに?」

信二 : 「ああ?そりゃ葬式に決まっているだろ」

竜次 : 「葬式!!誰の!?!」

信二 : 「天智先生のつてお前知らなかったのか?今、みうちちゃんや

蘭ちゃん

ほかの生徒達も数人言ってるぞ」

竜次 : 「!!クソ!!」

俺は、電話を切りすぐに走った・・・

こうして、ビルでの戦いが始まるうとしていた・・・

地獄の鬼ごっこ?・・・ビル前編

あの電話から、30分後俺はビルについていたが・・・
失敗した!!

武器持ってくるの忘れた・・・

クソ、このままだと確実に俺は死ぬ

どうする、帰って武器を取ってくるか?

いや、駄目だあいつはもうゲームを開始したって言った

だからもう、殺されている可能性だってあるが・・・

なんで、この場所にしたのだろう?

人目のつきにくい場所ならいくらでもあるのに、わざわざここに選んだのは?

まあ、その答えも危機に行くとするか

俺は、ビルの自動ドアに入った瞬間

ナイフが飛んできた!!

ツク、俺は何とか横に跳び回避した

けど、すぐにまた飛んできた!

竜次：「クソがああああああああ」

俺はそういつてすぐに近くのエレベーターへ走った

ちようど開いていたのでラッキーと思ったが・・・

?：「おっと、そこまでだなゲームオーバー」

竜次：「な!!」

入ったら人が俺に銃口を向けていた!!

竜次：「お前が虎太郎か？」

?：「虎太郎?誰だそれ？」

竜次：「ん?さっきのゲーム オーバーっていや、なんでもない」

?：「とりあえず、30階のボタンを押せ」

竜次：「わかった」

そして、30階のボタンを押したと同時に・・・

銃口を向けていたやつを脇腹を殴りつけた!!

? : 「クソが!」

竜次 : 「残念だったな!!」

今は、一人だ

だから、周りを気にせずに戦える!

しかも、エレベーターの中だから銃を構える時間がない!

俺はそう思って、銃口を向けていたやつを何とかして取り押さえた

竜次 : 「目的はなんだ?」

? : 「答えるわけねえだろうが!!」

竜次 : 「そうか、なら・・・」

俺はそういつてこいつが持つて銃を握りしめた

? : 「わ、わかった。教えるだから命だけは・・・」

竜次 : 「わかればいい。早く言え!」

? : 「お、俺達は、雇われてこの組織に入った」

竜次 : 「組織ってなんだ?」

? : 「組織って言うのは・・・」

つと言う直前にエレベーターの扉が開いた

少女 : 「え?」

しまった、一般人に見られた!!

? : 「助けてくれ!!!」

しかも、こいつ叫びやがった

最悪のタイミングだ

とにかく、こいつを殺して・・・

少女 : 「うう、うああああああん!!」

ツク泣き出した!!

どうする。こいつを殺せば確実にこの子のトラウマになる

だが、殺さなかったら・・・

そう、考えていると・・・放送が流れた

虎太郎 : 「もしもし、聞こえていますか??」

虎太郎??

なぜ？このタイミングで？

虎太郎：「あ、ついでに聞こえてますか？ってこのビルにいる人達に言ってます」

！???

さらに、わからなくなってきた

俺じゃなくてこのビルにいる人達??

虎太郎：「とりあえず、このビルは占拠しましたので、まあ、要するにみんな人質です」

虎太郎：「伝えたいことは、二つ皆さんこの場から出ないでください」

虎太郎：「もう、一つは目の前で誰が死のうと騒がないでください」

虎太郎：「これにて、放送を終わります」

.....

なるほどな、これで納得がした

あいつは、このビルにいる奴ら全員・・・殺すつもりなんだ

何が、人質だ

完璧に今の放送、誰かが死ぬがわかって言ったやつだ

しかも、この場から出ないでくださいは・・・

待てよ、考えたら俺あいつのこと何にも知らねえ

仕方ない、こいつに聞くとするか

?：「おい、今の放送ってなんだ？お前の仲間か？」

竜次：「ツは？何言ってるんだ？そつちのじゃないのか？」

?：「違う、俺達の任務はお前を殺すだけだから・・・」

竜次：「だから？」

?：「.....」

竜次：「おい、どうし.....」

虎太郎：「見つけた」

竜次：「!?!?!」

ウソだろ

まさか、もうここまで来たのか!?

虎太郎：「あ、しまった、いまのってかくれんぼしてる時に言うセリフじゃん。失敗したなあ」

クソどうする?目の前の子を救ってこいつをころ・・・

虎太郎：「あ、大丈夫だよ。今君が殺そうとしてる人もう殺したから」

!???

なんだと!?

いつの間に???

俺がこいつから目を離れたのは少しだけでさっきまでしゃべってたんだぞ?

やばいこのままだったら、この子も死んでしまう!!

俺はそう思って目の前の子を抱いて逃げた

虎太郎：「おっと、頑張るねえ。けど、鬼ごっこはまだ始まったばかりだよそんなに走ってもつのかなあ?」

うっせえ!!

こっちは今を生きてんだよ!!

こうして、虎太郎との殺し合いが始まった・・・

地獄の鬼ごっこ?ビル中編

なぜだ?

なんで虎太郎は俺の目の前にいたやつを殺せたんだ?

俺は走りながら考えた. . .

なぜ? 外傷もなく、しかも俺が気が付かなかった

そして. . . 走っていたらおかしなことに気が付いた
なんで?

この子は殺されてないんだ?

普通は、あの場にいた俺を含めて殺すのに. . .

そして、あいつが言っただやうに死んだやつが言っていた組織ってなんだ?

クソ、考えるほどわからなくなる. . .

とにかく、俺の武器は拳銃. . .

ってまでよ。よく考えたらあいつ、武器持っていなかった!!

いや、もしかしたら隠してたのかも知れないが. . .

それじゃあ、俺が反撃したとき出遅れてしまう

なぜだ. . . ?

とにかく、考えるのは後にして、この子をどこかに安全な場所に. . .

. . .

って、よく考えたら俺と一緒にいるほうが安全か. . .

でも、俺は任務があるどうすれば. . .

そう、思った時に電話がかかってきた. . .

竜次：「もしもし? 今忙しいんだけど?」

みう：「すみません、こつちも急ぎの用事が. . .

竜次：「何の用だ. . . って! みうか! ?」

みう：「はい、そうですけど. . .」

竜次：「今、どこにいる! ?」

みう：「今、天智先生のお葬式で. . . あ、ちゃんと蘭もいますよ」

竜次：「何回だ! ? ?」

みう：「ええつと、確か29階です・・・」

竜次：「29!？」

みう：「はい・・・」

竜次：「とにかく、急ぎの用はなんだ？」

みう：「はい、天智先生の妹さん・・・がいないんです」

竜次：「なに!!!」

みう：「正確にはトイレに行つて帰つてきてないんです」

竜次：「誰かついていかなかったのか!？」

みう：「はい、誰も・・・」

竜次：「そうか・・・特徴は??」

みう：「特徴??」

竜次：「ああ、どういう服着てたとか・・・」

みう：「ああ、それなら・・・」

数分が過ぎた・・・

竜次：「わかった。今からそつちに行くから待つてる」

みう：「わかりました。それじゃあ」

っぴ

さて、仕事的には上に上がりたいのだが・・・

この子をこのままほついたら殺されるだろう・・・

何しろ顔を見られたからな・・・

それに、してもこの子なんで?こんなところに来ているのだろうか?

そういえば、名前聞いてなかった、聞くか・・・

竜次：「そういえば、お前名前は？」

少女：「はい、私の名前は・・・」

そう言いかけた瞬間・・・

ナイフがまた飛んできた!!

竜次：「っチ」

俺はそのナイフを・・・体で受け止めた・・・

ツク・・・

虎太郎：「へえ、やるねえ」

竜次：「そりゃ、どうも・・・」

虎太郎：「でもねえ、僕もそろそろ飽きちゃたんだよねえ」

竜次：「だから？」

虎太郎：「だから、死んでほしい・・・」

そう言つて虎太郎は次に日本刀を構えた

虎太郎：「この日本刀は、君が殺した・・・者のやつだああああ！
！」

ツク、やばいこのまま切りつけられたら、守りきれねえ・・・
そう思つた時、銃声が聞こえた・・・

バアアン

そしたら、俺の左手が痛みだして・・・
動かなくなつた・・・

クソ、今度は左か・・・

そう、思っている内に虎太郎が距離を詰めてきた

ヤバい！！やられる！！

虎太郎：「伏せろ！！」

！？？

一瞬思考が停止した・・・

虎太郎が・・・俺をかばつたのだ・・・

虎太郎：「何してるんだ・・・こつちきて・・・」

竜次：「わ、わかつた」

俺は少女を連れてその場を後にした・・・

こうして、地獄の鬼ごつこの鬼が増えた・・・

地獄の鬼ごっこ?・・・ピル後編

竜次：「一体なぜ?俺達を助けた?」

俺は、あの銃撃の中から命からがら逃げてきた・・・
そして、今は隠れているのだが・・・

敵と一緒に・・・

虎太郎：「そうだねえ、僕としたら他人にこのゲームの荒らされた
って感じなんだ」

竜次：「それなら、俺を死んだ後にそいつらを殺せばいいだけだろ
?」

虎太郎：「確かにね、でも、それじゃあ、面白くない」

竜次：「面白くない?」

虎太郎：「つそ。僕としたら、今ここで君を殺すなんて簡単なこと
だ・・・」

竜次：「確かに、この子を守りながらじゃお前に勝つのはきつい」

虎太郎：「だろ?しかも、僕にはとっておきの物があるしね」

竜次：「爆弾か?」

虎太郎：「!!驚いた。まさか、気づかれていたとは・・・」

竜次：「かま、かけたつもりだったんだがな」

虎太郎：「まあ、いまさら気づかれても意味ないからな」

竜次：「なぜだ?」

虎太郎：「だって、後、3時間ほどで爆発するよ」

竜次：「!!まじか?」

虎太郎：「うん。大まじ、だって制限時間があと3時間だよ最初に
言ったよな?」

竜次：「なるほどな、でもなぜだ?」

虎太郎：「何が?」

竜次：「なぜ?それを教えてくれたんだ?」

虎太郎：「いやあ、ちよつと興味があつてね君に・・・」

竜次：「？」

虎太郎：「君は完璧に依頼をこなすはずなのに・・・今の君は完璧にこなしてない」

竜次：「どういうことだ？」

虎太郎：「だって、君死体をそのまま放置したでしょ」

竜次：「な！？何でそれを知っている？」

虎太郎：「だって、あの時、僕もあの場所にいたから」

竜次：「なるほど・・・お前が天智先生を殺したのか？」

虎太郎：「正解。でも、一つだけ失敗したんだよねえ」

竜次：「みうたちを殺すことか？」

虎太郎：「まあ、それもあるけど」

竜次：「ほかにもあるのか？」

虎太郎：「あるけど・・・喋ってる時間なさそうだよ？」

竜次：「そうだな」

そして、その瞬間、俺は虎太郎と別の方向から殺気を感じた！

バアン

銃声が鳴り響き

相手が叫んでいる

？：「おい！！ここにいるのはわかっている早く出てこい！！」

誰が出るかよ

そう、思った時虎太郎が・・・

虎太郎：「はい、わかりましたー」

そう言つて敵のほうに向かってナイフを投げつけた！！

？：「つえ??？」

そう言つて男は倒れた

竜次：「早いな」

虎太郎：「まあね、それじゃあここからは別行動だ」

竜次：「じゃあな」

虎太郎：「次、あつた時まで生きててね」

俺はその言葉を聞いてその場から逃げだした

そして、エレベーターに乗り29階まで行った

29階

竜次：「みう！蘭！！」

みう：「！先生！！」

竜次：「とにかく・・・って二人だけか？」

29階には誰もいないこの二人しか・・・

蘭：「はい、ほかの子は全員逃げ出したんですが・・・美野里ちゃんも・・・って連れてきてるじゃないですか？」

竜次：「はい？なぜ？ここにはお前とこの女の子しか・・・ってまさか！！」

みう：「はい、その子が美野里ちゃんです」

竜次：「ええ！！俺てつきり18、9歳ぐらいの学生って思ってた・・・」

蘭：「いえ、小学生ですよ？」

その瞬間電話が鳴った

竜次：「もしもし？」

虎太郎：「もしもし？」

竜次：「虎太郎！？何の用だ？」

虎太郎：「ああ、忠告するだけだから」

竜次：「何か起こったのか？」

虎太郎：「うん、実はねさっきの死体調べたのだけど・・・この組織の人達多分ドーピング使ってるから気を付けたほうがいいよ」

竜次：「え！？何の？」

虎太郎：「ああ、ええっと・・・ごめん、言いにくいんだけど僕の知っている奴だいたい使っているぽい・・・」

竜次：「まじか！！」

虎太郎：「うん、だから今回はゲーム中止でこいつらの殲滅するかから逃げたほうがいいよ」

竜次：「どうやって？」

ほかにも「なぜ？」っと思っ点が山ほどある！！

もしかして・・・あいつ・・・

俺を殺すつもりがなかった？

・・・どうする？

もう、ここでみうたちを助けて終わりにするか？

それとも、実験体0719（虎太郎）を助けるか？

どっちにする？

今の俺なら選べるぞ・・・

・・・いや、迷ってる時間はねえ

竜次：「もしもし？信二頼みたいことがあるんだ・・・」

俺は・・・信二にへりの遠隔操作を頼みビルに戻ることにした

みう：「ちよっと！！先生何してるの！？へりがでちゃうよ??？」

竜次：「大丈夫だ。また、学院でな・・・」

そして、鬼ごっこは終わり・・・

新たな、遊びが始まるうとしていた・・・

制限されたかくれんぼ……始編

へりが飛んで行った……

これで、俺の任務は終わり

後は、個人的に気になるから俺は残った……

さて、ここからどうしよう？

っと考えていたら殺気を感じた！！

バアンと鳴り響いた

俺は、体をずらして避けた……

黒服の男：「雨竜竜次だな？」

竜次：「ああ、そうだ」

黒服の男：「なら、ついてきてもらいたいのだが……」

竜次：「断る！」

黒服の男：「なら、死んでもらう」

黒服の男は、俺の方向に銃口を向けた

竜次：「それで、俺が殺せるとでも？」

黒服の男：「ああ、いくらお前が強くても銃で撃たれたら死ぬだろ

？しかも、今のお前は、血だらけだ……」

竜次：「確かに、ナイフや銃に撃たれて傷だらけだ……しかも、

左手は動かない」

黒服の男：「それは、いいことを聞いた」

竜次：「けどな、まだ右手は動くんだ？」

黒服の男：「それで、何が……！！」

俺は、銃を取り出した

竜次：「お前の仲間から頂いたものだ」

黒服の男は今にも拳銃を撃とうとしていたがその前に俺が撃った……

バアン

そして、倒れた・・・

竜次：「ふう、こんなぐらいで死んでたまるかよ」

そして、ビルの中に入ろうと思った時に思った
後何分ぐらいで爆発だ？

俺はそう思い虎太郎に電話をかけた

竜次：「もしもし？虎太郎か？」

？：「いえ、違いますよ」

竜次：「!??？」

？：「どなた、ですか？虎太郎に何の用ですか？」

竜次：「お前は誰だ!？」

？：「人に名前を聞くときは自分が先でしょ？」

竜次：「断る!」

？：「まあ、いいです。あなたのことは知っていますし・・・」

竜次：「なら、虎太郎はどうしたこのケータイは虎太郎のだぞ？」

？：「ええ、虎太郎君が出れない状況なので今は私が出ています」

竜次：「何をした!?!？」

？：「それは、自分で確認してください」

竜次：「クソ!」

？：「そうそう、あなたがこのケータイに電話したのって爆弾のこ
とでしょ？」

竜次：「そうだが・・・」

？：「ご安心を爆弾はすべて解除しましたので・・・」

竜次：「どうやって!？」

？：「それは、自分で考えてください」

竜次：「最後に聞かせてくれ、名前は？」

？：「あなたと同じ実験体ですよ」

そう言つて、電話を切られた

クソ、まさか虎太郎はもう死んだのか？

いや、殺したとはまだ言つてない

とにかく、虎太郎を探るか・・・

つとビルに入ったが・・・
？何かがおかしい
なんだ？この奇妙な空気は・・・
それだけじゃない
さっきまでいた人が誰もいない
一体何があつたんだ！？

こうして、また、遊びが始まった

制限されたかくれんぼ……殺害編

15階

???

なぜだ？

誰もいないんだ？

爆弾は解除されたって言って半信半疑だったけど
もう、とつくに10分は過ぎた

なら、敵がいるはず……

なのに、誰もいないなんておかしすぎる
なぜだ？

フロア内探しても誰もいない

5階

とうとう、後、少してここを出ることができると
こんなに静かなのはなぜだ？

1階

俺は一階まで下りてきた

誰もいない

おかしい

このビル何かがおかしい？

なんなんだ？この胸騒ぎは

虎太郎は一体どこにいるんだ？

その瞬間ケータイが鳴った

竜次：「もしもし？」

信二：「俺だ、信二だ」

竜次：「何の用だ？今忙しいんだが……」

信二：「いや、報告ちゃんとみうちちゃん達をお前の家に送ったぞ」

竜次：「そうか、ありがとな」

信二：「っで？何かあったのか？」

竜次：「なんでそう思う？」

信二：「そりゃ、へりに乗り込まずにいったんだから何かあるとおもうだろ？」

竜次：「言われてみればそうだな」

信二：「つで？もう一回聞く何があった？」

竜次：「わかった。話す何があったか」

そして、俺は実験体のことを信二に話した・・・

信二：「まじかよ・・・まさか生き残っていたやつが俺達以外にもいたのかよ」

竜次：「ああ、最初に聞いた時は正直ビックリした」

信二：「で。お前は虎太郎って言うやつを助けるために残ったと・・・」

竜次：「そういうことだな」

信二：「まあ、お前らしくていいんじゃない？」

竜次：「俺らしいか・・・」

信二：「とりあえず、お前は今どこにいる？」

竜次：「一階だけど・・・？」

信二：「今、そのビルのデータベースにハッキングしたんだが」

竜次：「いつもながら早いな・・・」

信二：「まあ、そこは置いといて・・・どうも、そのビル地下があるみたいだぞ？」

竜次：「まじか？」

信二：「大まじだ」

竜次：「じゃあ、どこらへんにあるか教えてく・・・」
殺気を感じた！！

竜次：「すまんが切るぞ！！」

信二：「え！？ちょ！？」

さて？何が飛んでくる？

銃か？それとも？

ナイフか？

ルイス：「ノーコメント」

竜次：「なら、死んでもらう！」

俺は、すぐに拳銃を取り出し撃とうとした瞬間、周りからものすごい量の殺気を感じた！！

ルイス：「撃たないほうがいいですよ？私を殺せてもあなたが死ぬ・・・」

竜次：「もう、一つだけ質問してもいいか？」

ルイス：「なんですか？」

竜次：「お前・・・実験体って言うていたけど何の実験体だ？」

ルイス：「それは、ちよつと答えられませんね」

竜次：「そうか・・・ついでに聞くが俺のことどこまで知ってる？」

ルイス：「だいたい、知っていますよ。あなたが元殺し屋だってこと・・・」

竜次：「元じゃあねえよ」

ルイス：「まあ、いいです。後は、あなたが教師をやっていることぐらいですかね？」

竜次：「そうか、なら、俺が何の実験体か知らないんだな？」

ルイス：「それが、どうしました？」

竜次：「いやあ？それを知っていたらちよつとこの場面ひっくり返すの面倒だったからな・・・」

ルイス：「まさか、あなたこの状況をひっくり返すつもりですか？」

竜次：「そうだが？」

ルイス：「それは、楽しみです。でも、今のあなたは傷だらけ何ができるんです？」

竜次：「そうだな、ついでに左手も動かないし」

ルイス：「それで、何かできるとお思いで？監視カメラの映像からもあなたはもう満足に動けない。さつさと投降すれば許しますよ？」

竜次：「監視カメラで見てたならわかるだろ？俺は、狙撃の攻撃以外はすべて守ろうとして受けた傷だから・・・」

ルイス：「っは！！それはあなたが弱いつて証拠なんじゃないです

か？」

竜次：「そうだな、俺は弱いよ。だがな、守ろうとするものが近くにいないなら俺は存分に暴れることができる!!」

ルイス：「何を馬鹿なこと・・・」

俺は、ルイスに近寄り一気に殴った!

ルイス：「ウツゴ・まだだああああ」

そのあとも、俺は殴り続けた

そして、周りのやつらの殺気を感じたらすぐに・・・

ルイスを盾にして脅した・・・

竜次：「今から一歩でも動いたやつはこいつと同じ目にあわずぞ!!」

男達：「!!!?!」

こうして、脅しておけば何とか・・・

バアン

な!?

まさか、撃つたのか?

ルイス：「ガツハ!!!!」

竜次：「おい? どうし・・・」

ルイスは撃たれていた・・・

竜次：「おい! しっかりしろ!!」

ルイス：「ま、まさか、あなたがその言葉を使うとはね・・・」

竜次：「お前には、まだ聞きたいことがあるんだよ!!」

ルイス：「わかりました。いいですよ、教えてあげます・・・虎太郎

郎さんは今・・・地下・・・」

バアン

そしてまた銃声が鳴り響き庇おうとしても左手が動かず・・・ルイスの体を貫いた

竜次：「おい! 目を覚ませ!!」

ルイス：「・・・」

クソ。もう死んでる、

誰だ？止めを撃つたのは？

？：「いやあ、言ったらだめじゃないルイス君」

竜次：「お前・・・」

虎太郎？：「いやあ、ビックリしたなあまさかルイス君が僕のこと
売ろうとしてたなんて・・・」

竜次：「お前・・・本当に虎太郎か？」

虎太郎？：「なあに言つての？僕以外に誰に見えるの？」

竜次：「そうだな、俺には虎太郎の皮をかぶった化け物にしか見え
ねえよ」

虎太郎？：「君つてさあバカなの？化け物なんてこの世に存在する
わけが・・・」

竜次：「残念だったな。俺はいやと言うほど見てきたよ、あの監獄
でな・・・」

虎太郎？：「・・・へえ、さすがは・・・雨竜の名を継いだん
じゃないんだ・・・」

竜次：「だつたら、さつさと元の姿になれ、どうせなんかの薬品で
変えてんだろ？」

？：「つち、ちよつとはこの薬を信じていたんだけどな・・・」

そう言つて男は顔のをはがした

？：「さて、自己紹介としますか・・・俺の名前は雅お前みやびとは違つ

施設の出だ・・・」

竜次：「そうか・・・よく生きてたな」

雅：「そうですね、確かにあの事件がなければ俺達は死んでいたよ・

・・・」

こうして、ルイスは死に、虎太郎は行方不明、さらには、また実験
体の雅つてやつが現れた・・・

制限されたかくれんぼ……薬編

竜次：「じゃ、ここらで、昔話でもするか？」

雅：「いや、いいよ。どうせ聞いても意味ないしな」

竜次：「どういうことだ？」

雅：「そのままの意味だよ……さて、そろそろあんたを殺さない
と次の仕事に間に合ないんだが……」

竜次：「次の仕事？」

雅：「ああ、あんたの学園の生徒皆殺しって言う簡単な仕事だ」
！！

竜次：「へえ、なら俺も昔話なんてしてたらいけないな……」

雅：「いや？しててもいいじゃねえか？」

竜次：「なぜだ？」

雅：「だってもう、俺の部下50人ほど向かわせたから……」

竜次：「な！？」

雅：「そうだな、後20分くらいで学院について殺し始めるかな？」

竜次：「っチ！」

俺が、ここに来るまで走ってきたが30分くらいかかった
なら、もう無理ってことか？

いや、もう一つだけある学院のみんな助ける方法が……

俺は電話を取り出した

竜次：「もしもし、信二か？」

信二：「あいよ、俺だけど……」

竜次：「今すぐ学院に言ってくれないか？」

信二：「断る！！」

竜次：「頼む、後で金渡すから」

信二：「絶対にやだ！！」

竜次：「子供か！！」

信二：「子供もいいからやだ！！」

竜次：「頼むから言ってくれよ・・・」

信二：「どうせ、お前の敵が向かって間に合わないから言ってくれ
だろ？」

竜次：「そうか、わかってんなら言ってくれよ・・・」

信二：「自業自得じゃん、自分でやれよ」

竜次：「・・・それが、無理だからお前に頼むんだよ」

信二：「わかった・・・お前が無理って言うからには理由があるん
だろうな？」

竜次：「ああ、ちゃんと俺の頼み聞いてくれたら後で取って置き
話をしてやるよ」

信二：「いいよ、やってやる。って時間と敵の数は？」

竜次：「時間は20分後ぐらいで、敵の数は50人らしい」

信二：「やめてもいいですか？」

竜次：「さつき言ってくれたよな、やってやるって・・・」

信二：「チクシヨウ!!」

竜次：「じゃよろしくな」

そう言っただけは電話を切った

雅：「何の電話してたんだ？」

竜次：「ん？ああ、お前の部下全滅させるための電話」

雅：「へえ、面白い冗談言うな・・・」

そう言っただけは俺の方向に向かって瞬間移動してきたか速さで目の
前に走ってきた

そして、雅はそのまま俺に殴り掛かってきた

竜次：「っチ！」

俺はそのパンチを避け、けりを入れようとした

だが、雅はそれを避け、日本刀を取り出した

竜次：「おい、それって・・・」

雅：「ああ、虎太郎の持ち物だったやつだ」

竜次：「お前が虎太郎をやったのか？」

雅：「いや、殺してないぜ・・・俺はこれでも殺すのは選ぶんだ」

竜次：「俺はもう終わりしたいんだ・・・」

2分後

雅：「ガハ！まだだ・・・」

竜次：「たった2分でそんなんだから勝てる見込みないぞ？」

雅：「まだだつて言ってるだろうがああああああ！！」

竜次：「殺しちゃいけないから力加減できないんだが・・・」

俺はもう本気を出していない・・・

雅は頑張り殴り続けているが全然俺には聞いていない・・・

雅：「はあはあ」

竜次：「ん？もう終わりか？」

雅：「まだだ」

竜次：「そろそろ、そのセリフも飽きてきたんだが・・・」

雅：「うつせえええええええ！！」

はあ、もうなんか錯乱状態だな・・・

どうしよ・・・どう見ても教えてくれる雰囲気じゃないな・・・

雅：「はあはあ、お前に殺されるくらいなら・・・」

竜次：「ん？自殺か？」

雅：「ああ、お前も巻き込める取って置きがあるんだ・・・」

竜次：「・・・爆弾か？虎太郎が仕掛けた・・・」

雅：「正解だ・・・」

竜次：「そうか、なら使われる前に死んでもらうか・・・」

そう言つて俺は、雅にゆつくりと近づいた・・・

雅：「つく、くるなああ、それ以上近づいたら木端微塵だぞ！」

竜次：「っで？」

雅：「さすがのお前もこのビルを破壊する爆弾にはたえれないだろ
う？」

竜次：「さあ？」

雅：「え？まさか・・・これでも死なないのか？」

竜次：「試したことがねえからわかんねえけど爆発した瞬間にこの
場所から逃げ出す自信はあるぞ？」

雅：「はは、どこまで無敵なんだよ……お前……」

竜次：「だから、ほぼ無敵だって……」

雅：「どっちでも、いいよ……ってほぼ!？」

竜次：「今頃かよ……」

雅：「なら、冥土の土産に教えてくれよ……どうやったらその状態で殺せるか……」

竜次：「教えるって言ってもなあ、……ああ、一つだけあるぞ絶対の弱点が……」

雅：「絶対の弱点？」

竜次：「さつき飲んだ薬な……実はその日の体調によって変化するんだ……」

雅：「その日の状態？」

竜次：「ああ、今日は左手が使えなく、全身血だらけで飲んだから……通常の30分の1くらいしか出てねえよ……」

雅：「なら、本気じゃなかったってことか……」

竜次：「いや、本気でやったよまあ途中から力緩めたけど……」

雅：「はは、遊ばれてこのざまか……」

竜次：「つで、そろそろ虎太郎の居場所を教えてほしいんだが……」

雅：「はあああ、わかったよ。虎太郎は……ここの地下の入り口付近に縛りつけていたからすぐに見つかるよ」

竜次：「そうか……」

雅：「一つ聞いていいか？何で同じ殺し屋の虎太郎を助けようとするんだ？」

竜次：「あいつの行動は矛盾ばかりだったからそれを聞きたいだけだよ……」

雅：「そうか、てつきり俺はあいつに惚れたのかなと思ったのだが……」

竜次：「？惚れた？」

雅：「……いや、なんでもない」

竜次：「じゃ、俺はいくぞ・・・」

雅：「そうか、じゃ俺は死ぬかな・・・」

竜次：「は？お前まさか！？」

雅：「ここまで、ボロボロにされたんだ・・・もう死なせてくれよ・・・」

竜次：「・・・」

雅：「大丈夫だお前に迷惑かからないように・・・」

竜次：「はあ、何勝手に死のうとしてんだ？」

雅：「いいじゃねか死なせてくれ」

竜次：「最後に質問がある、お前の部下はそれで納得するのか？」

雅：「どういうことだ？」

竜次：「もし、お前が死んだならそいつらが俺を殺しにこないか？」

雅：「・・・」

竜次：「なら、生きる！復讐でこれ以上生徒が危険にさらされると面倒なんだ」

雅：「今、部下が学院に向かってるのにか？」

竜次：「ああ、それなら信二が何とかしてくれるからなんとかなるだろ・・・」

雅：「そうか・・・」

竜次：「だから、これはもう不問にする・・・だから、生きる！」

雅：「」

.....

竜次：「雅？」

学院中での戦闘

雅：「……………」

竜次：「おい！雅！？」

雅：「……………」

竜次：「Z？」

雅：「ZZZZZZZZZZ」

竜次：「……………」

俺の中で何かが壊れるような音がした……

竜次：「……………」そうか話している最中に寝るか……」

俺は何とか我慢しその場を後にした……

さて、とりあえず虎太郎の救出と後は信二がやってくれている部下の殲滅手伝うか

俺は階段を下りてすぐ虎太郎を見つけた

竜次：「おい、大丈夫か？」

虎太郎：「何とかね……………」ってなんで君がここにいるの！？」

竜次：「いや、お前を助けに来ただけ……………」

虎太郎：「そ、そう」

竜次：「あとは、矛盾している点の答えが欲しかったくらいかな……………」

虎太郎：「わかったよ、後でちゃんと答えてあげるよ」

竜次：「よし、じゃあここから出るぞ。急いで学園に行かないと信

二に怒られるしな」

虎太郎：「りょーかい」

そして、俺達は学園に向かった

学園 正門前

虎太郎：「はあはあはあ」

竜次：「おい、大丈夫か？」

虎太郎：「う、うん。とりあえずもう少しだけ頑張るよ」

竜次：「無理するなよ」

虎太郎：「わかった」

学園 寮前

虎太郎：「……………」

……虎太郎は絶句していた

まあ、こんな風景は見られないと誰もがそうなってしまうに違いない
一人のハンマーを持った男が大勢の男たちを吹っ飛ばしているのだ
から

竜次：「……いつみてもすごい光景だよ……」

虎太郎：「竜次あの人のこと知ってるの？」

竜次：「まあ、今回の助っ人なんだけどな」

虎太郎：「どうやったたらあんなにでかいハンマー振り回せるの？」

そう、絶句する理由は飛ばされてるだけじゃない

体は、中ぐらいなのにハンマーの大きさはその倍近くあるのだから

・

竜次：「それは、聞かないでやってくれ……」

虎太郎：「わかったよ」

竜次：「まあ、そろそろ俺も参加してくるけどお前もくるか？」

虎太郎：「いや、遠慮しとくよ。ちよつと疲れているし」

竜次：「わかつたじゃ、言ってくる」

そう言つて俺は信二に近づいた

信二：「お！やつと来たか。この色男」

竜次：「……俺もお前の敵つてことでいいか？」

信二：「ストップ！ごめん、冗談だから！」

竜次：「本当か？」

信二：「本当、本当！」

竜次：「まあいいか、とりあえず手伝いに来たぞ」

信二：「お！それは助かる最近体動かしてなかったから苦戦してた
んだよ」

竜次：「あと、10人もいないの？」

信二：「・・・」

竜次：「おい、黙るな」

信二：「まあ、それは置いて報酬の件だが」

竜次：「あ、いくらだ？」

信二：「100億でいいぜ！」

竜次：「・・・ごめん、もう一回」

信二：「だから、100億・・・ガハ！！」

俺は金額を聞いた瞬間に信二の脇腹に拳を入れた

竜次：「なんだ！その法外な値段！」

信二：「いや、ちよつと待って話・ゴフっ！」

3分後

信二：「すみませんでしたあああああああああああああ」

信二は土下座をしていた・・・

竜次：「いやあな、俺だつてこんなしんどいことするには大目に見るよ!？」

竜次：「でもな、お前のは高すぎだああああああ」

俺はそう言い信二を倒した

竜次：「ふう、これでおわ・・・そう言えば雅の部下数人残つてたな・・・」

雅の部下たちは俺が信二を倒した途端に俺に襲い掛かってきた

竜次：「・・・さつさと逃げといたらよかつたもの・・・」

学院中での戦闘？

10分後

竜次：「はあ、もうちよつと持ってくれよ・・・」

俺は学院に来ていた雅の部下たちを全員倒した・・・

部下：「ガハツ！！ウソだろ50人の部隊がもう全滅だと？」

竜次：「まあ、結果そうなったな」

部下：「ありえない、ありえないこんなことがあってたまるか」

竜次：「とにかく、もうここには近づかないでくれるかな？」

部下：「断る！！我々は雅さんの命令で・・・」

竜次：「その、雅も俺がもう倒したよ」

部下：「な!？」

竜次：「とりあえずここは学院の敷地だから出てっってくれるかな？」

さもないと・・・」

部下：「わ、わかった、わかったから殺さないでくれ！」

竜次：「2分だけ待ってやる」

2分後

竜次：「・・・信二！もう土下座はいいぞ」

信二：「・・・・・・・・・・」

竜次：「信二？」

信二：「・・・・・・・・・・」

竜次：「・・・・・・・・・・」

信二：「・・・・・・・・・・」

竜次：「寝たふりは俺には意味ないって知っているよな？」

信二：「・・・・・・・・・・」

竜次：「そうか、本当に寝ちゃったかじゃあお前の大事にしている」

信二：「壊すなよ!？」

竜次：「わかってるよ。でも、もし今度またやったら・・・」

信二：「はあ、わかったよって報酬のことだけど」

竜次：「お！？いくらにしてくれた？」

信二：「10億でいいよ」

俺はまた信二の脇腹に拳を入れた

数分後

信二：「……すみませんでしたああああ」

信二もまた土下座した

信二：「ふう、報酬はもういらねえよ」

竜次：「ん？なぜだ？いつもならこれぐらいで引き下がらないのに」

信二：「……お前またあの薬飲んだら？」

竜次：「ああ、飲まねえとちよつとやばかった」

信二：「はあ、実験体を何人相手したんだ？」

竜次：「わかつているだけで3人」

信二：「3人！！？よく生き延びたな……」

竜次：「いや、相手つて言っても一人は仲間割れで死にもう一人は薬のおかげで勝てた」

信二：「もう一人は？」

竜次：「ん？ああ、お前の後ろにいるぞ？」

信二：「まじか！？」

そう言つて信二は後ろに振り返つた

虎太郎：「残念！！竜次！君の後ろだ！！」

竜次：「まじで！？」

俺は後ろに振り返つたら虎太郎がいた！！

竜次：「なんで、さっきの場所にいないんだよ！？」

虎太郎：「いや、君の後ろが一番安全だと思つたからずっと後ろにいたよ？」

竜次：「ウソだろ……まったく気づかなかつたぞ……」

信二：「隙ありいいいいいいいい」

そう言つて信二は俺にハンマーを振りかぶつてきた

竜次：「ちょ！！信二何すんだ！？」

信二：「いや、お前だけなんか確実にフラグを立てているとなんだ

かムカついてな・・・」

竜次：「フラグ？何のことだ？」

信二：「そうか、わからないか・・・よし、今夜俺んちに泊まりに
来い！！」

竜次：「なぜ!？」

信二：「お前に萌えっつて言っつものを教えてやる!!」

竜次：「ちょ!とりあえず、ハンマーで殴ろうとするな!!」

学院中での戦闘？

30分後

竜次：「はあはあ、た、頼むからハンマー振り回さないでくれ・・・」

信二：「はあはあ、知るか！今日という今日は萌えについて教えてやる！！！」

虎太郎：「いやあ、すごいねえかれこれ30分くらい戦っているよ君達」

竜次：「まじかよ」

虎太郎：「つで、まだ、戦うの？」

竜次：「俺としたらやめたいのだが・・・」

信二：「おとなしく、ハンマーにぶたれるおおおおおおおお」

竜次：「つて、うわ！！！」

虎太郎：「ちょ！本当にそろそろやめといたほうがいいよ!？」

信二：「うせええええ！！、モテねえ男の気持ちかわかってたまるかああああ！！！」

竜次：「それは俺もだぞ！！！」

信二：「お前はケンカ売ってんのかああああああああ！！！」

竜次：「やばいな。虎太郎ちょっと手伝ってくれねえか？」

虎太郎：「何を手伝えばいいの？」

竜次：「あいつに、ちょっと黙ってもらいたいから本気で一発殴りたいんだ」

虎太郎：「・・・まあ、今の君はもらってばかりだからね」

竜次：「仕方ねえだろ。あいつのほうが今は早いんだから・・・」

虎太郎：「今は？」

竜次：「それも、後で話すからとりあえず動きとめてくれねえか？」

虎太郎：「それ、すごくきついんじゃないの？」

竜次：「多分、今月で一番辛いことに入ると思う・・・」

虎太郎：「別にいいけど」

竜次：「あ！一応スーツ着てこいよ？」

虎太郎：「なぜ？」

竜次：「いいから、いいから」

虎太郎：「わかった、着てくるよ」

竜次：「じゃあ、今日は解散つてことで」

虎太郎：「そう言えば、この・・・そういえば名前聞いてなかった」

竜次：「ああ、こいつの紹介も明日するよ」

虎太郎：「りょーかい」

学院全体に響く声

次の日

虎太郎：「おーい！りゅーじー」

竜次：「お！やつと来たか」

虎太郎：「はあ、なんでスーツなんだよ」

竜次：「いいから、いいから」

虎太郎：「つで、その死体は何？」

信二：「・・・」

竜次：「ん？ただの屍だけど・・・」

信二：「・・・」

虎太郎：「だめだよー、殺したなら証拠隠滅しないと・・・」

信二：「・・・ま」

竜次：「ん？ま？」

信二：「まだ生きてらあああああ！！」

虎太郎：「うわ！？まだ、生きてる！！」

信二：「勝手に人をころすんじゃねええええええ！！」

竜次：「さて、とりあえず、お前もこれ着ろ」

信二：「ん？タキシード？」

竜次：「違う。いや、色は同じだけど」

虎太郎：「それって、この学院の教師の服じゃ」

竜次：「ああ、こいつにはたつぷりとお置きしねえとな」

信二：「・・・帰って寝たいんだけど・・・」

竜次：「あ！そう言えばお前の家、火事になってたぞ？」

信二：「は！？」

竜次：「いや、この服の帰り道にお前の家周辺が火事になってた」

信二：「まじか！！？」

虎太郎：「ああ、それなら僕も聞いてるよ」

信二：「うわ〜本当ぽい」

竜次：「つで、今のお前は帰る家がないのだけど・・・」

信二：「・・・すみません。ちよつとの間居候してください」

虎太郎：「え？何で？アパートでも借りればいいんじゃない？」

竜次：「こいつ、銀行に金預けてないし保険にも入っていないから・・・」

虎太郎：「なるほど・・・」

信二：「ちくしょおおおおおおおおお！！」

竜次：「で、こいつは今ハンマー一個？」

信二：「いや、これの予備は後3個ほどある」

竜次：「ハンマー3個しかこいつは今持っていないってわけ」

虎太郎：「そう言えば、みうちゃん達は？」

竜次：「ああ、今も俺の家で寝て・・・」

竜次：「すまん、信二俺の家は無理だ！！」

信二：「ウソ!？」

竜次：「と言うわけで、金貸すからアパートでもマンションでも借りる」

信二：「ええ~~~~」

竜次：「・・・」

信二：「わかりました!!」

虎太郎：「無言で信二にわからせた!!」

信二：「じゃあ、アパート借りてくるから金貸してくれよ」

竜次：「学校終わってからでいいか？」

信二：「まあ、そのくらいは待つわ」

竜次：「じゃあ、これに着替えてる。不審者だと思われるからな」

信二：「へいへい」

虎太郎：「つで、僕達にこんな恰好させてどうするの？」

竜次：「まあ、とりあえず学園長室に行ってくれないか？昨日のここの戦闘についてで・・・」

信二：「わかったよ、それは俺もついて行くは」

竜次：「じゃあ、いってらっしゃい」

信二：「!?」

虎太郎：「!?」

信二：「なんで?お前も行くじゃないのか?」

竜次：「俺は家に用事があるから」

虎太郎：「うん、わかった・・・」

学園長室

学園長：「ええ〜とどちらさんで?」

信二：「平たく言うと竜次の友達です」

虎太郎：「右に同じく」

学園長：「ああ!竜次先生の友達ですね?話は聞いていますよ」

信二：「それで・・・」

学園長：「まあまあ、ここで話をするのもなんですし場所を変えましょう」

虎太郎：「いや、ここでいいのですが」

学園長：「まあまああ」

体育館

学院長：「え〜それではここで新しい教師を説明します」

信二：「?」

虎太郎：「誰か雇ったのかな?」

竜次：「さあ、それでは紹介します!!」

その時電気が消えた

竜次：「とりあえず、中央の方によってくれ」

虎太郎：「なんで?」

竜次：「新しい教師を守るため」

竜次：「生徒は俺が何とかするから」

信二：「あいよ」

竜次：「それでは、紹介します!!信二先生と虎太郎先生だあああああああ!!」

そして、スポットライトが信二と虎太郎にあたった

信二：「は?」

虎太郎：「マジ？」

学園長：「それでは、挨拶をお願いします」

信二と虎太郎：「なんじゃこりゃあああああああああああああ
あ！！！！」

学院でのケンカ

放課後

竜次：「いやあ、良いことしたなあ」

みう：「そうですね、まさか先生を二人も見つけてきますとは」

蘭：「ほんと、すっごいよー」

俺は放課後になりみうや蘭と一緒にいた

蘭：「でねえ、今度デートしてくれませんか？」

竜次：「話の流れからそれが来るとは思わなかったよ」

蘭：「いいですか？」

みう：「だめだよ、蘭ちゃん先生だって忙しいんだから」

蘭：「ちえ〜」

平和だ

こんな平和な日には、ゆつくりと家で

竜次：「茶でもすすりたいなあ」

蘭：「じゃ、飲みます？」

竜次：「人の思考回路を読むじゃない!!」

みう：「いや、今思いつきり言っていましたよ」

竜次：「ほんと!?!」

まあ、いいや

でも、多分後数分で嵐が来るな・・・

原因作ったの俺だけど・・・

信二：「見〜つ〜め〜た〜ぞ〜竜次!!」

みうと蘭：「きゃあ!?!」

竜次：「おい、信二あんまり生徒を驚かすんじゃない!」

虎太郎：「見つけたよ、竜次」

竜次：「・・・虎太郎とりあえず殺気を出すのやめてくれないか？」

信二：「竜次先生ちよつと校舎裏まで来てくれますか？」

虎太郎：「あ、それ僕も行きます」

竜次：「丁寧な言葉を使っても殺気は隠れてないぞ・・・」
信二：「じゃあ、今日飲みに行きませんか？」

竜次：「断る!!」

みつ：「あの話の流れが全く分からないのですが・・・」

竜次：「ごめん、みつ。これはあとで話すからちよっとの間付き合っ
つてくれ」

蘭：「ええ〜！みつちゃんと付き合つのですか？」

竜次：「大丈夫蘭にも付き合ってもらおうから」

蘭：「まさかの二股!!」

信二：「・・・」

竜次：「やばいな・・・蘭ちよっと黙って置いてくれないか？」

蘭：「わかりました〜」

竜次：「っで？何の用だ？」

信二：「このリア充がああああああああああああああああああ」

竜次：「おい！ここでハンマー振り回すな!!」

虎太郎：「わかったよ、ハンマーじゃなけりゃいいんだね？」

竜次：「そう言っただけナイフを取り出すな!!」

虎太郎：「大丈夫、生徒にはあたらないようにするから、君が避け
なかつたらね」

竜次：「それは、俺に避けるな！って言っているのか!？」

虎太郎：「・・・」

竜次：「黙るな!!」

数分後

竜次：「はあはあ、わかったとりあえず武器をしまっしてくれ」

信二：「話を聞かせてもらおうじゃないか」

虎太郎：「できるだけ早めにね・・・」

竜次：「ここじゃ誰かに聞かれる可能性があるから宿直室に行こう」

信二：「わかった」

学院での真実

宿直室

竜次：「よし、ここなら聞かれる心配はないな・・・」

みう：「あの、私達も入ってよかったのでしょうか？」

蘭：「いいんじゃない？ここに来るまでの間に返さなかったんだから？」

竜次：「ああ、これはみうと蘭にも聞いておいて欲しいんだ」

虎太郎：「でも？このメンバーの接点って何？」

信二：「確かに、俺はみうちゃんや蘭ちゃんとは初めて会うしな・・・」

虎太郎：「いや、それは僕もなんだけど」

竜次：「そうだな、どこから話そうか・・・」

竜次：「虎太郎！お前は一か月前にこの学院にいたよな？」

虎太郎：「ん、いたよ」

竜次：「じゃあ、その時天智先生を殺した相手を見たか？」

虎太郎：「それは・・・僕が殺したって言ってなかったけ？」

竜次：「その線はねえよ」

虎太郎：「どうして？」

竜次：「普通は敵討ちにそいつが持っていた武器なんて使わない、後敵に拾わせたりは絶対にしない」

竜次：「だから、お前はコンビで組んでいたんじゃない一人でここにきてたんだ」

虎太郎：「参ったねえそこまで、見破られているとは・・・」

虎太郎：「いいよ、あの時のこと話すよ・・・」

虎太郎：「僕はある時、確かに一人でここに侵入していた・・・天智先生に会うためにね」

竜次：「は！？て言うことはお前天智先生と・・・」

虎太郎：「うん、知り合いだった初とは監獄を出た後に結構お世話

になつていたからね」

信二：「それで？」

虎太郎：「初は自分が狙われているって知ってたから僕はそれを助けようとした・・・けど失敗した」

竜次：「どうして？」

虎太郎：「理由は簡単だよ、相手が強すぎたんだ」

信二：「要するに負けただってことだな」

虎太郎：「うん、初めてだったよ一対一で負けたのは」

竜次：「そうか」

虎太郎：「つで、そいつを止めきれずに僕は初を見殺しにしたって訳」

竜次：「そいつは、コンビのどっちだ？」

虎太郎：「なにが？」

竜次：「だから、刀を持っているか、持っていないか」

虎太郎：「刀は二人とも持っているよでも、もう一つの武器が違う」

竜次：「もう一つの武器？」

虎太郎：「あいつらは刀ともう一つ違う武器を持っているだ・・・

だから君が殺したのは僕を倒したのと違うよ」

竜次：「つと言うことはそいつを殺せば天智先生の敵討ちになるわけだな」

虎太郎：「うん、でも戦う時は気を付けてね」

竜次：「わかっているそのくらいは」

信二：「おーい、そろそろ、次の質問してもいいか？」

竜次：「他になんかあったけ？」

信二：「なんで俺たちが教師をやらなはいけななんだ？」

竜次：「それは・・・」

信二：「色々聞きたいけど・・・とりあえずそれを聞かせてくれねえか？」

竜次：「わかったわかったから、ゆっくりと近づいてくるな！」

竜次：「理由は二つ」

竜次：「一つは信二お前も知つての通り俺は昨日クスリを飲んだ」

信二：「やっぱり、飲んでいたか」

竜次：「だから、俺はしばらく休みたいんだ」

信二：「わかったそれについては許そう」

虎太郎：「あのう、僕には何が言っているかわからないんだけど・
・」

みうと蘭：「私達も・・・」

信二：「実は俺も・・・」

竜次：「信二！！お前は違うだろ！！」

信二：「ばれたか！！」

竜次：「ばれるわ！！」

竜次：「とりあえず、みう達に話すのは初めてだな・・・」

竜次：「俺の、強さの秘密を・・・」

吹き出す血

竜次：「俺の強さの秘密はな・・・」

信二：「おー！とー！とー！そこまで！！しゃべるな竜次！！」

そう言つて信二は俺の口をふさいだ

竜次：「ふご！しふじなにすふんだ！？」

信二：「バカ！お前それしゃべると色々面倒なことになるだろ！！」

竜次：「とりあえず、口ふさぐのやめろ！」

虎太郎：「なんか聞いちゃいけないことなの？」

信二：「お前は確か・監獄の方を出たつて言ったな」

虎太郎：「うん、そうだけど」

信二：「そつちでは、何の実験させられていた？」

虎太郎：「！」

虎太郎：「わかった、これ以上は聞かないよ」

竜次：「別にいいだろしゃべっても！」

信二：「駄目だ、お前まさかの計画を壊すつもりじゃないだろう

な？」

竜次：「その、計画は関係ない！ただ、こいつらはもう部外者じゃ

ないんだ」

信二：「それでも、しゃべるな！」

竜次：「ツク、わかったよ」

みつ：「あのう、聞いちゃまずいですか？」

竜次：「いや、もうしゃべらないからいいよ」

蘭：「つで、もう一つは？」

竜次：「何が？」

蘭：「さつき、二つあるつて言いましたよね？」

竜次：「ああ、もう一つはな」

竜次：「・・・」

信二：「ん？どうした？」

竜次：「すまん、これはまた今度話す・・・」

虎太郎：「何かあったの？」

竜次：「いや、もう時間なんだ・・・」

みう：「何のですか？」

信二：「お前！まさか!？」

竜次：「その、まさかだ・・・」

俺は、体全体から血を吹き出し・・・倒れた

みう：「え？」

蘭：「なにこれ・・・？」

虎太郎：「・・・？」

信二：「つち、もう時間なのかよ!？」

虎太郎：「！一体何が起きてるの？」

信二：「クスリの副作用みたいなものだ・・・このままだと確実に

竜次は死ぬ!」

みう：「え？えっ!？」

蘭：「・・・」

クソ・・・やっぱ体が動かないな・・・

信二を連れてきておいて正解だぜ・・・

しかし、ここまで血が噴き出すとは・・・

俺もそろそろなのかな・・・

竜次の過去

ん？これは夢か？
懐かしいなこのころは信二や仲間たちと一緒にバカみたいな騒ぎを
してたな・・・

8年前

ガキン！！

男：「グハ！！」

竜次：「どうした？ジャツシユこの程度か？」

ジャツシユ：「いいや、まだ終わってないさ」

女：「どつちもがんばれー！！」

信二：「どつちか決めないのかアンジエ？」

アンジエ：「決めなくてもいいでしょ？」

信二：「まあな」

数分後

ジヨツシユ：「はあはあ、参った」

竜次：「ふう、やっとか」

信二：「おいよ、二人ともお疲れさん」

アンジエ：「はい、これタオルです」

ジャツシユ：「サンキュ」

竜次：「あちがとな」

俺達はブレイン王国の騎士をやっていた

2年前に軍隊が来たときは腹が立ったが・・・

もう、あそこの住民とも仲良くなったみたいだ・・・

なにより、ここにきてみんなとも出会えたから

信二：「それにしても、竜次、お前は本当に強いな」

ジャツシユ：「なんで、そんなに強いんだ？」

竜次：「俺にもわからないけど、時折体が勝手に動くことがあるんだ。それのおかげだと、思うんだが・・・」

信二：「バカ！それは、俺達も一緒だろ？」

竜次：「だよなあ」

アンジエ：「もしかして、女王様に何かもらったりしてますの？」

竜次：「！？」

信二：「！？なんだその反応？」

ジャツシュ：「何か隠してるのか？」

竜次：「いや、そうじゃなくてなんで俺が女王様に会ったこと知ってるんだ！？」

信二：「そりゃ、お前が女王様のお気に入りなんだからしかたないだろ？」

ジャツシュ：「そう言えば、お前が騎士団長になってから多くなっ
たよな見かけるの」

竜次：「そりゃ、仕事があるからな」

アンジエ：「仕事だけですか？」

竜次：「う！」

信二：「ああ、お前にかあつただろ？その反応！」

竜次：「いや、ナニモナイヨ？」

いや、確かに仕事以外で珍しいお菓子とか食べていたけど・・・

ジャツシュ：「片言になってるぞ？こいつ」

アンジエ：「気になりますねえ」

竜次：「・・・」

信二：「・・・」

アンジエ：「・・・」

ジャツシュ：「・・・」

竜次：「ここは・・・」

竜次：「逃げるが勝ち！！」

信二：「おい！逃げるな！！」

ジャツシュ：「逃がしはしないぞ！」

アンジエ：「って言っても竜次さんの走りに勝てる人は少ないと思
いますけど・・・」

王室

竜次：「失礼します女王様」

女王：「あら、来たのね竜次くん？」

竜次：「はい」

女王様の名前は知らない・・・

だが、この人が新しく王になりこの国はいい方向に向かっている
もともとはこの人のお父さんがやっていたが1年ほど前に死んだ
そして、俺達・・・地下牢獄にいた俺達を助けてくれた
俺はこの人に一生ついて行こうともう思っている

女王：「つで、今日の報告は？」

竜次：「今日は市街のパトロールなど色々しましたがいつも通りで
した」

女王：「そう、わかりました。じゃあ、下がってください」

竜次：「わかりました」

楽しかった・・・

確かにこのころはいやなこともあっただがそれ以上に楽しいことが
あった

でも、あの日すべてぶち壊された

すべてを灰に・・・

ドッカーン！！

竜次：「っは！！」

俺は目を覚ました・・・

爆発音みたいなのが聞こえたから・・・

竜次：「ツク・・・今、何時で何日だ？」

？：「お前が寝てから三日後だ・・・」

俺は、銃を突き付けられた・・・

竜次：「お前は誰だ？」

？：「申し遅れたな・・・俺の名はジンお前に殺された弟の兄だ・・・」

竜次：「すまねえな、山ほど殺してきたんだ・・・誰の弟だ？」

ジン：「この学園だ・・・」

竜次：「！・・・なら、お前が天智先生を殺したのか？」

ジン：「そうだ、弟に監視させて俺は、虎太郎と戦っていた」

竜次：「そうか・・・そう言えば、さっきの爆発音ってなんだ？」

ジン：「教えてやるよ・・・学寮が爆発した音だ」

竜次：「なんだと!？」

ジン：「お前が寝ている間にこの学園にいた生徒全員殺さしてもらったよ」

竜次：「ウソだろ!? 信二たちは？」

ジン：「最初に殺したよ」

竜次：「・・・」

俺は啞然とした・・・

まさか、信二たちがもう死んでいて・・・

学院の生徒もいない・・・

俺が寝ていたから・・・

ジン：「そう、悔やむことはないさ・・・すぐにお前もあいつらの

もとに連れて行ってやるから」

俺の体は・・・あの時のように勝手に動いた・・・
こいつを殺すために・・・

十分後

ジン：「ガハ！！やめる・・・助けてくれ！！」

竜次：「・・・」

ジン：「頼む！！頼むから！！」

バン！！

そして、俺はこいつを殺した・・・

・・・俺は一体何がしたかったんだ？

こいつを殺したかったのか？

・・・なんかもうどうでもいいや

死んだ者はもう生き返らない・・・

それが、この世のルール

そして、俺はそのルールからは逃げられない

だから、もうどうでもいい

あの生活に戻ろう・・・

殺すだけの生活に・・・

そして、今度からは・・・

本当に誰もいない・・・

一人ぼっちの生活・・・

誰もいない・・・

殺すだけの・・・

.....

.....

.....

.....

.....

.....

楽しかったな・・・

この生活・・・
でも、みんな死んだのなら取り返せない・・・
なら、もうこの学園もいらぬよな・・・

俺は、この学園の最後の仕事をした・・・
その仕事は・・・俺がすべてを背負う仕事・・・
方法は簡単だ・・・この学園を燃やせばいい
そして、後に燃やした動画をネットにでも流せば世間は信じてくれ
る・・・
そうすればいいんだ・・・
もう、俺が殺して、ただの逃亡生活が始まり・・・
そして、最後は誰にも看取られずに死ねばいいんだ・・・
自殺はしない・・・
こいつらに失礼だから・・・
でも、この学園の人が殺されたって事実は俺一人が知っていればい
い・・・
だから・・・
この学園を燃やす・・・

殺し屋が女学院で教師をやっています・・・

・ END

すべてを灰に・・・（後書き）

いままで、読んでくれて本当にありがとうございました

また、この小説の続編は新しくタイトルを変えて書きたいなと思います

一応、主役は竜次です・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4102v/>

殺し屋が女学院で教師をやっています・・・

2011年9月1日19時26分発行